

## 2023年10月の総評に代えて

○林 桂 ○

● さ い う ● (愛知県 18歳)

ぶきょうに  
つむいだ手話の  
つばくろ、が  
あなたの胸で羽ばたいている

【評】燕の手話の所作には、羽ばたくさまはないので、「胸で羽ばたいている」は胸元での手話の所作ではなく、心中のことであろう。手話で呼び出した燕が、呼び出した「あなた」の胸を震わせているのだ。「ぶきょうに」は、手話で使い慣れた言葉ではないさまだろう。燕を見た感動を伝えようとしたのであり、その感動が冷めやらず胸にあることだろう。

● ビスコ ● (愛知県 49歳)

負け惜しみさえ可愛い  
拗ねても駄々をこねても  
愛おしかった  
永遠に三歳の妹

【評】「永遠に三歳」は、三歳で亡くなつたということであろう。可愛い盛りの妹であってみれば、すべての所作が胸に焼き付いたまま離れなくなってしまっているのだ。

● 小沢旭 ●（山梨県 22歳）

飯を搔っ込みながら漠然と  
死にたくないって思ったが  
普段は死にたいのかな

【評】漠然ではあれ死にたくないと思う瞬間があった。では死にたくないと思わずには漠然と生きてる瞬間は、死とどう向き合っているのだろうか。「普段は死にたいのかな」の自己省察は意外にも深い。

● あお ●（奈良県 25歳）

もう会えない  
人がいるっていいことよ、と  
祖母は巨峰を剥きながら言う

【評】祖母はたくさん人の死を体験し、また別れを経験してきたのである。「もう会えない／人がいるっていいことよ」には、深い悲しみを超えた祖母の人生哲学

がこもっていそうである。

●スズキセーイホン●(千葉県 55歳)

電柱はときに墓標で空に立つ  
(天野洋品店)閉店

【評】高柳重信に「杭のごとく／墓／たちならび／打ちこまれ」がある。杭のように林立する墓は、杭に間違われて打ちこまれる。こちらは電柱。しかし、墓標のように立っていれば、やがて墓標として扱われかねない。誰の墓標となるのか。「(天野用品店)閉店」は、その示唆か。

●日下部 友奏●(群馬県 18歳)

蟠螂の目が藍色になる角度

【評】昆虫の中で、カマキリはファイターである。鎌を振り、ファイティングポーズをとる。俳句などでも「蟠螂の顔の三角」などのように、動く頭部の威圧感を書いてきた。しかし、作者が見るのは、その三角の頭に乗っている大きな目である。しかも、藍色になる角度を発見する。言わば、カマキリの内面をのぞき込み、共感するような趣きである。カマキリを詠ん

では、稀有なスタンスのように思う。

● 和泉次郎 ●（新潟県 48歳）

駐車場発券機から声がする  
帰らなくてもいいのか君は

【評】駐車場の発券機にセットされた人の声。二十四時間、そこに居続けて対応の声を出し続ける。「帰らなくてもいいのか君は」は、機械音を超えた人声と捉えた呼び掛けである。作者の孤独感が呼び掛けさせたように思われる。

● 篠遠 早紀 ●（東京都 25歳）

深秋の夜景に家族葬の文字

【評】電光の看板であろう。深秋の夜闇に明るく浮き上がっている。様々な広告があるなかで、「家族葬」が持つ意味を思う。人の死も広告活動の対象となっているのだ。

● 猫背の犬 ●（山口県 26歳）

並木道 僕と同じ名の犬が

僕より幸せそうで嬉しい

【評】並木道の途上で擦れ違った犬の散歩。飼い主が呼んだ犬の名が自分と同じであることに気づく。しかも、その犬は大切にされていて幸福そうである。「僕より幸せそうで」がしみじみとした感慨を誘う。幸福感の薄い日々を生きながらも、同じ名前の犬が幸せそうだということだけでもしばし慰む思いなのだ。

● 花野 木春 ●（東京都 29歳）

方舟に乗れない側の人類だ  
卵の賞味期限も切らして

【評】選ばれない側の存在としての自分を見つめる。卵の賞味期限も管理できない自分の日常生活がその例示だ。

● 枝植 雅一 ●（愛知県 55歳）

近所に住む九七歳のばあばが  
昨日、  
冷蔵庫を買い替えました。

【評】生きるとはこういうことなのだろう。他人からは何年の余命もなさそうな

九十七歳であっても、今日の生活で冷蔵庫が壊れたり、不調であれば、買いかえる必要がある。今日を生きるという意味では、年齢は関係ないのである。

● 織田 航平 ●（北海道 21歳）

値下げした弁当喰らう  
この僕は一体何割引なんだろう

【評】コンビニのトップが、コンビニに寄るか寄らないかの不毛な論争がある。コンビニも賞味期限切れの商品を割引で販売するようになった。スーパーの夕刻、割引シールを貼る店員の周りには、人だかりができている。私たちは、少しでも安く買おうとする努力を自然としている。「この僕は一体何割引なんだろう」は、労働市場で高く売れるどころか、定価販売も難しいかもしれないという厳しい思いが誘発されたものであろう。